

Title	<紹介>山本一著『藤原俊成 思索する歌びと』
Author(s)	竹端, 紀子
Citation	語文. 2015, 104, p. 70-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70959
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

山本一著『藤原俊成 思索する歌びと』

竹端紀子

藤原俊成は、著名な和歌の実作者であると同時に、勅撰集の撰者や歌合判者といった「批評家」の一面も有する人物である。本書は、後者の「批評家」としての俊成に焦点をあてる。

本書の主眼は、和歌作品における俊成の批評方法の実際を明らかにすることにある。しばしばその歌人の「個人的嗜好」を伺うという観点から考察されてきた歌論書や歌合判詞を、和歌史・歌論史における俊成の和歌批評の方法を探るといふ観点から読み解いてゆく。藤原俊成に関する既発表論文のほぼ全てを、その多くが改訂・補訂を加えて収録されており、長年一貫したテーマを持って書き続けられた、山本氏の研究の全貌をうかがうことが出来る。以下に、本書の構成を示す。

藤原俊成とは誰か？

第一部 和歌批評の基準を求めて

— 主著『古来風体抄』が語るもの —

第一章 導入部が語るもの — 「人の心」と歌 — / 第二章 仏典引用が語るもの — 仏教的歌論の再定義 — / 第三章 主題をめぐる検討 / 第四章 和歌史から何を学ぶのか — 俊成的批評主体の条件 — / 第五章 情動表現への共感 — 古今集歌の享受

— / 第六章 貫之「むすぶ手の」歌はどう読まれたのか — 「歌の本体」の理解のために — / 第七章 直観を導く古歌 — 「古今集本体説」が意味するもの —

第二部 批評者俊成の形成と転身

— 批評語「幽玄」の追跡から —

第八章 「幽玄」の批評機能・序論 — 建仁元年『十五夜撰歌合』の場合 — / 第九章 秀歌でない歌の「幽玄」 — 永万二年「中宮亮重家歌合」など — / 第十章 西行との批評的対決と「幽玄」 — 「御裳濯河歌合」の場合 — / 第十一章 伝統を志向する「幽玄」 — 「六百番歌合」の場合 — / 第十二章 最晩年の「幽玄」用例 — 和歌史の動向の中で —

第三部 歌論史・和歌史と藤原俊成

1 『和歌体十種』を読む — 和歌批評の基準を問う歌論として — / 2 俊成「述懐百首」への一視角 — 若き俊成の仏教信仰と源俊賴 —

巻末にはあとがき・初出一覧・事項索引・和歌索引を付す。

第一部は、俊成の主著『古来風体抄』の主題と構成について、その全体的な意味を解き明かす。山本氏は、俊成が『古来風体抄』で扱った問題が「実作の問題」ではなく、「批評の問題」にあるという見解を示す。『古来風体抄』の主題が、「どのようにして歌のよしあしを見分けるか」にあるという問題意識のもと、俊成の和歌作品の享受・評価・批評の基準や方法を読み解いてゆく。

そして『古来風体抄』は、和歌の直観的鑑賞力を磨くこと、和歌の歴史の変遷を認識することを通して、自立した批評能力の確立を求める書物であると論じている。また、俊成自身の主体的・個人的な美意識との関連について、いくつかの視点から検討を加えている。

第Ⅱ部は、俊成の歌合判詞における批評方法を、「幽玄」という語を通して明らかにすることを目指す。俊成が判者を勤めた永万二年『中宮亮重家歌合』から最晩年の『千五百番歌合』まで、幅広い年代の歌合を対象とする。それぞれの歌合で、幾度となく用いられる批評語「幽玄」がどのような狙いのもとに、有効性を發揮しているのか考察を重ねていく。目まぐるしく変化する歌壇史の状況を念頭に置きつつ、歌合判詞における「幽玄」という語の用法の変化を追跡することで、俊成の批評方法を導き出す。読者は、俊成の歌合判詞を読み解いていく中で、批評基準をめぐる問題の複雑さや豊かさに改めて気づかされるだろう。

第Ⅲ部は、本書の主題と間接的に関係する論考二本を収める。1は、これまで体系的に不統一だと評されてきた『和歌体十種』の再評価を試みる。『和歌体十種』各体が、いかなる必要性や有効性を想定した上で構成されているのかを論じている。2は、青年期の作品『述懐百首』を対象とし、俊成の和歌活動と仏教信仰との関係を考察する。

本書を貫くのは、和歌の批評活動を実作から相対的に独立した表現活動の一つであると捉えた上で、俊成の歌論書や歌合判詞を

読み解こうとする姿勢である。広く和歌研究を行う者に、貴重な視座を提示してくれていると言えるだろう。

巻頭で山本氏自身が述べているように、数々の歌合判者を務めた俊成の実績は、和歌の良し悪しを定める価値判断がどのような根拠と経路によって可能になるのか、絶えず自省せざるを得なかった事情を窺わせる。本書の書名にある通り、俊成はまさしく「思索する歌びと」であった。「批評家」として苦悩する俊成の一面を、本書は鮮明に浮かび上がらせている。

(三弥井書店、平成二十六年七月、二九五頁、六、四〇〇円＋税)

(たけばた・のりこ 本学大学院博士前期課程)